〈青森県史〉の窓 121

縄文時代のシカ

伊藤 由美子
（県民生活文化課 県史編さんグループ 主幹）

今、青森県ではニホンジカの北上が問題になっている。江戸時代を最後に青森県内に分布していなかったニホンジカが県内各所で目撃されている。全国的にもシカが増え、農作物や森林への被害が問題となっている。青森県ではそれに加えて世界遺産白神山地の生態系に影響を及ぼす可能性も指摘されている。

ニホンジカ（以下、シカ）と人との関わりは縄文時代にさかのぼる。動物骨・人骨・魚骨などは、火山性の酸性土壌では分解されてしまうため多くの遺跡では出土せず、地下水などで空気が遮断される低湿地や、貝類が共に捨てられ酸が中和される貝塚などから出土する。

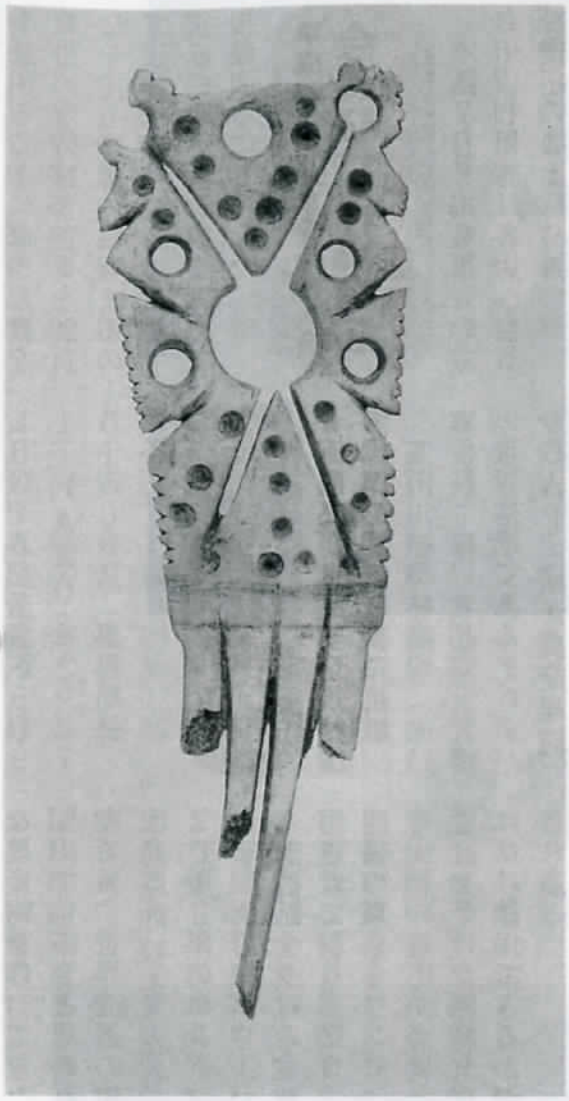
本州の縄文時代遺跡で、特に東北地方南部より南でシカは多く出土し、縄文人が積極的に狩っていたと考えられている。シカは肉だけではなく、角や骨は釣り針や針など骨角器の原料になる。また硬い角は石器製作などの道具として利用されていた。遺跡からの出土例は無いが、皮も利用されていたであろう。

青森県内の縄文遺跡からも早期中葉以降、貝塚や低湿地遺跡からシカの骨が出土している。八戸市長七谷地貝塚では土壌を全量回収し分析した結果、シカやイノシシといった動物骨の割合が非常に少なく、漁労中心の生活だったことが推定されている。

縄文時代前期の東北町東道ノ上（3）遺跡では、遺跡が立地する丘陵から川に面した斜面地に、土器・貝類・獣骨などが捨てられた「捨て場」が見つかった。土壌を回収して分析した結果、個体数ではシカよりノウサギが多かった。青森市三内丸山遺跡の縄文時代前期の捨て場（第6鉄塔地区）で、ほ乳類はノウサギ・ムササビが全体の8割をしめ、シカの割合はとても少ないことが報告されている。一方で八戸市南郷畑内遺跡前期の捨て場ではシカが多く出土している。

約9，000年前以降、対馬暖流が日本海を北上し、その後津軽海峡を経て太平洋に流入すると、現在と同様に青森市も含め日本海側では冬に雪が降る気候になる。シカは降雪量が多いと動きが規制され、現代の分布域も積雪と関係があるという考えがある。前述の三内丸山遺跡で、シカ出土数が少ないことも積雪と関係があるという説がある。

近年の研究により、シカの下顎骨の分析から死亡した季節を推定でき、東道ノ上（3）遺跡では一年を通じてシカを狩っていた結果がでている。また、出土した人骨の安定同位体の比率から食べていた食料の復元もできるようになりつつある。青森県における縄文時代の人とシカとの関係は、今後研究が進むにつれ徐々に明らかになるだろう。その結果、現代の問題解決の手がかりへつながることを期待したい。



二ツ森貝塚出土鹿角製櫛（県重宝）
青森県埋蔵文化財調査センター所蔵